フィンランドの教育

すべての人たちのために

フィンランドの教育制度は、自分の人生を自由に選択しやすくなるように設計されています。社会経済的背景やその他の要因に関わらず、すべての子どもに等しく教育の機会が与えられ、各段階で一人ひとりの学習に支援が用意されています。

世界のどの国でも重要な財産は人、つまり人材です。急速に変化し続ける現代社会では、活動的かつ有意義な生活を送るには、それ相応のスキルが必要です。子どもは、学び方を学ぶためのスキルとレジリエンスを身につける必要があります。

フィンランドのウェルビーイングの土台は、継続的な学習と教育への総合的なアプローチからなり、就学前教育の段階から子どもたちに必要な支援をします。

フィンランド教育の未来には明るい可能性があります。その可能性を実現するためには、すべての人たちが質の高い教育を受けられるようにする必要があります。適切なツールがあれば、さまざまな課題にも対処することができます。ぜひご一読ください。

目次

04 機会の平等

06 フィンランドの教育制度

08 幼児教育

12 総合学校

16 後期中等教育

20 未来のスキル

22 専門性の高い教師

24 高等教育

28 すべての人に学ぶ機会を

32 フィンランド教育の最新情報

発行: 2024年 フィンランド外務省
編集: 駐日フィンランド大使館広報部
本文: Katja Pantzar
翻訳: 靴家さちこ
制作: Otavamedia Oy
日本語版レイアウト: 遠藤悦郎 / Etsuro Design
表紙写真: Miika Kainu

Photo: Visit Oulu

Photo: Marek Sabogal / Business Finland Media Bank / Visit Finland

Photo: iStock

無償で
平等な
質の高い
教育を
すべての人に

フィンランド教育の基本原則

フィンランドの教育制度は、一人ひとりに人生を模索する平等な機会が与えられ、選択の自由が委ねられてこそ、国家がその人間的・経済的潜在能力を発揮できるという強い信念の上に成り立っています。

この機会均等の方針は、教育が全段階の大部分において無償であるという事実に表れています。子どもが18歳になるまで、教材費、給食、遠方からの通学にかかる交通費も支払う必要がありません。EU/EEA 圏の学生も学位取得が目的の場合、高等教育（大学レベル）も無償で提供されています。

フィンランド社会の基盤は「信頼」です。フィンランドには学校ランキングはありません。その代わりに、学校と教師たちがそれぞれ自己評価を行います。学校評価はトップダウンで管理する手段ではなく、教師と児童生徒の活動を支援するものであり、監視ではなく育成することの重要性が強調されています。信頼と協力が要なのです。

子どもを中心に据えた教育制度では、生活環境などの要因に関係なく、誰もが平等な教育の機会を享受します。このアプローチの歴史は、1970 年代の教育改革にさかのぼります。

重点は学力だけでなく、子どもをサポートし、学びへの積極的な参加を促すことに置かれています。

ウェルビーイングの重要性

効果的な学習環境とは、児童生徒の基本的な身体的、精神的および社会的ニーズに応えるものです。一人ひとりが自分に最適な学習方法を見つけ、課題をかかえている児童生徒をサポートすることが重要です。健全な学習環境は、成績評価や競争ではなく、深い観察と支援のなかから生まれるものです。

大多数の子どもや若者が、原則的に最寄りの公立学校に通うのは、地域社会の共同体意識を育むのに役立ちます。

Photo: Sakari Piippo / Finland Image Bank

平等を重視

世界の一部の国と比較すると、フィンランドは全国の学校間にほとんど差がなく、ほぼ均質な教育が提供されています。フィンランドの教育制度の要は平等であるため、包括的で質の高い教育制度は公的機関が担い、私立の学校はごく少数です。私立であっても国のコアカリキュラムに従い、税金を財源としています。

フィンランドのすべての学校は公費で運営されています。法律により、すべての人が全段階で無償教育を受ける権利があります。さらに学用品や食事など、学習に必要なサポートがすべて追加料金なしで含まれています。

子どもが主役

フィンランドの子どもたちは7歳から1年生となり、早い段階で将来の進路を選択する必要のない、柔軟な教育制度の下で学びます。義務教育は 18 歳まで続きます。

フィンランドの子どもたちは他国に比べ、より少ない授業時間とより少ない宿題で効率的に学んでいます。

小学校から、学校の休み時間は 15 分で、友達との交流や遊びが学習の促進に役立っています。

フィンランドの学校には共通テストや学校審査はありません。

教育システムの土台は信頼です。学習科学の専門家である教師に、大きな裁量権が与えられています。教師の仕事の中心は、すべての子どもたちの成長を支援することです。

第二言語としてのフィンランド語指導は、児童の母語が公用語（フィンランド語、スウェーデン語、サーミ語）ではない場合、多言語の背景がある場合、または基礎的なフィンランド語スキルに支援が必要な場合に、ニーズに応じて受けることができます。

フィンランド教育の目標は、すべての人たちが生涯学習の喜びを享受することです。教育制度に終わりはありません。年齢や学歴などに関係なく、誰でもいつでも教育を受けることができます。

総合教育（小・中学校）の後には、職業訓練、高校などの後期中等教育、大学や応用科学大学の高等教育にいたるまで、さまざまな進学の選択肢があります。

この教育システムは、一人ひとりの学習を、全段階でサポートするように設計されています。

フィンランド教育の歩み

1866 → フィンランド初の小学校法成立*

1921 → 義務教育法成立。7-13 歳のすべての子どもを対象とし、母語を学ぶ権利を認める

1943 → 学校給食法により、1948 年までに全国で昼食の無償提供が実現

1958 → 義務教育を2年延長

1971 → 学校週 5 日制を導入（以前は平日と土曜午前）

1972 – 77 → 二部構成だった学校制度から「総合学校」への改革

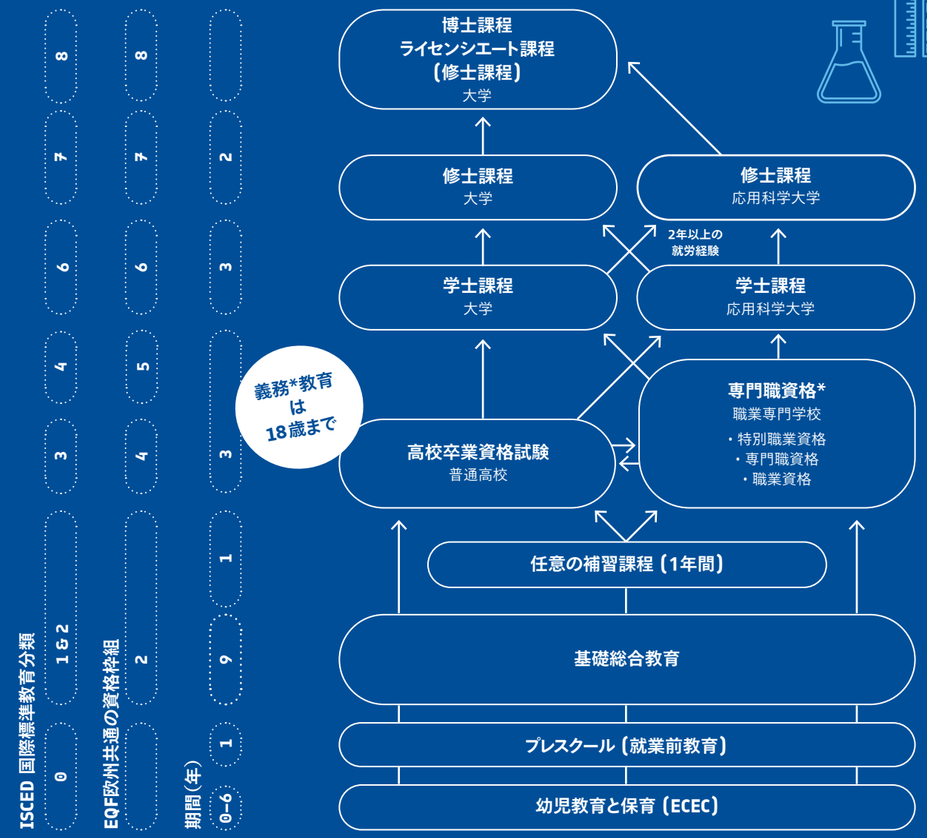
2015 → 6 歳児の就学前教育義務化

2016 → デジタル時代の新しいスキルとコンピテンシーを備えたコアカリキュラムの改訂

2021 → 義務教育年齢を 18 歳に引き上げ

*) https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/03468758108578982

フィンランドの教育制度



リベラル成人教育
成人教育センター
国民成人学校
夏期大学
学習センター
スポーツ学院

芸術教育
建築学校
美術学校
手工芸学校
視覚芸術学校
音楽院
スピーチアートスクール
サーカススクール
ダンススクール
演劇学校

*) 見習い訓練や実務研修も含む

フィンランドでは、すべての就学前の
子どもたちに、幼児教育と
保育（ECEC）を受ける権利があります。
ECECに参加するかどうかは
保護者の決定になります。

Photos: Miika Kainu

就学までのやさしいステップ

フィンランドの幼児教育・保育（ECEC）には、複数の保育士が働いている保育園と、保育士が自宅などで預かる家庭的保育の2種類があります。

「心がけているのは、『子ども中心』であること」と語るアンニカ・パカリネンは、首都圏のヴァンター市で幼児教育および特別支援教育を担当する教師です。「遊びを通じて子どもは子どもらしくいられ、教育学に基づく行き届いた環境にいることで、学ぶ喜びも同時に身につけることができます」

生涯学習のはじまり

子どもたちには各自、ECEC プランが立案され、それぞれのニーズに合った計画的かつ目的指向の教育、指導やケアが確実に受けられるようになっています。

フィンランドの ECEC および就学前教育の分野で働くすべての教師と同様に、パカリネンも大学の学位を取得しています。

パカリネンが勤めるヴァンター市保育園の開園時間は午前6時から午後6時まで。16人の子どもたちに、ECEC 教師が2名、保育士が2名とグループアシスタントが1名ついています。

平日はいつも一緒に朝食を食べることから始まり、子どもたちは食育やテーブルマナー、他者との交流といった日常生活のスキルも学びます。

アクティビティの時間は午前9時から午前11時までで、日によってアウトドア活動や運動、特別なアートや手工芸の体験をしたり、遠足に出かけたりします。

昼食を食べた後は、生後9ヵ月から5歳までの子どもたちはお昼寝をし、しない子どもたちはお話を聞くなどしながら、静かに過ごします。

子どもたちは、午後3時または3時半頃から外遊びを楽しみ、再び屋内に戻って一日の終わりを迎えます。

保護者は各家庭のスケジュールに沿って、外遊び中か、外遊び後に屋内に戻った子どもたちを迎えに来ます。

遊びを通じて学びをサポート

子どもたちは外や遊び場で動き回っている時でも、屋内で絵を描いている時でも、社会的スキルや手先の細かい機能、運動能力を積極的に習得しています。

「私たちは子どもたちとしっかり向き合い、遊びを通じて重要な生活や学校のスキルを教えることを目標としています」と、パカリネンは言います。

こちらのQRコードから、ヴァンター市の保育園の動画をご覧いただけます。

対人スキルを学ぶ

フィンランドの保育園では、子どもたちは生きていくのに不可欠な対人スキルを伸ばす方法を学びます。

自己認識、自己管理、社会的認識、対人関係のスキルと責任ある意思決定を行う能力は、「社会性と情動の学習」、つまり SEL（= Social Emotional Learning）として認知されています。

SEL の実践例のひとつが、自分と他人に対する共感力を学ぶことが挙げられます。

子どもたちが自分の声や意見の重要性を早い段階で学べば、社会参加への敷居も下がります。

SEL を学び実践されると、合意されたルールの尊重と周りの人たちと協力する際の信頼が高まり、いじめの防止にも役立ちます。

ライフスキルと知識を学ぶ

フィンランドの初等教育および前期中等教育は、フィンランド社会のすべてを支える基礎です。

基礎教育は児童生徒が人道的で倫理的に責任のある社会の一員として成長するのを支援し、人生に必要な知識とスキルを提供します。

フィンランドの初等・前期中等教育とは、7 歳から 16 歳までの子どもたちを対象とした、総合学校 1 年生から 9 年生までの 9 年間を指します。

教育の基盤は、平等とインクルージョンに基づいて構築されています。

フィンランドでは、社会経済的背景やその他の要因に関係なく、子どもと若者の誰もが無償で教育を受ける平等な機会が与えられるべきとされています。

教育基盤をつくる

フィンランドのすべての学校は、各教科の目標と中心的な内容が書かれた国のコアカリキュラムに従っています。教育提供者（多くの場合が自治体）と学校は、コアカリキュラムの枠組みのなかで独自のカリキュラムを作成します。

教科は、母語（フィンランド語、スウェーデン語、サーミ語）と文学から、外国語、数学、環境学習、生物、地理、物理、化学、保健、宗教または倫理、歴史、社会、音楽、視覚芸術、工芸、家庭科、体育までと、多岐にわたります。

児童生徒には教材と毎日の給食と、医療福祉サービスが無償で提供され、自宅が 5 キロ以上離れている場合には、学校までの交通費も支給されます。

すべての子どもたちが自宅に近い学校に通えることは、地域社会の共同体意識の構築にも役立ちます。いくつか条件がありますが、学区外の学校に通うことも可能です。

フィンランドには総合学校が約 2000 校あります。総合学校はすべて、子どもたちのニーズに合わせて一般的な支援から学力の強化、あるいは特別な支援を提供しています。

フィンランドに移住してきた子どもや若者には、フィンランド語やスウェーデン語の準備教育など、さまざまなサポートが用意されています。

目標は、すべての子どもたちに生涯学習に結び付く学ぶ喜びを喚起し、総合的な教育の可能性を保障することです。

Photo: Elina Manninen / Keksi / Finland Image Bank

学校の一日

フィンランド第三の都市タンペレにあるソリラ総合学校は3つの建物からなり、そのうちソリラ校舎は絵画のように美しい建物です。

この歴史的な木造建物は1898年に建てられたものですが、近年、新しい建築基準に合わせて改築されました。

ソリラの木造校舎は、児童の一人、アデリン・ラニスト（11歳）にとって、特別な魅力を感じる空間です。

「この学校で一番古い建物は、1920年代には教会だったの。当時の人たちが何を着ていたか、席に座ってどう振るまっていたかを想像するのが好き」と語るアデリン。好きな教科は歴史だと言います。

小学５年生のアデリンは、両親と弟、二人の妹と暮らしています。自宅は学校の愛称でもあるソリラという地域の近くにあります。

アデリンの一日の授業時間は平均４～５時間と、フィンランドの小学校では一般的な長さです。

１～２年生の低学年向けに放課後クラブや課外活動が組織されており、主に学校の敷地内で運営されています。これらの取り組みは、放課後を一人で過ごすにはまだ幼い子どもたちが、親が働いている間に組織化されたアクティビティに参加するためのものです。

典型的な金曜日

金曜日の朝、アデリンは午前7時20分に起きます。朝食は、チーズとキュウリのスライスをのせたパンと、ヨーグルトとリンゴジュースが定番です。

学校は、ほぼ毎朝８時半に始まるので、アデリンは８時10分ごろに家を出ます。

アデリンは学校まで公共バスで３キロの距離を通っていますが、バス停まで歩く１キロの時間を含めると通学には約20分かかります。春と秋の暖かい季節は自転車通学で、所要時間は約15～20分

Photos: Ilari Välimäki

ほどです。

金曜日には時々、彼女の父親が車で学校まで送ってくれることもあります。

金曜日の授業は 5 時間あり、数学と工作と社会の授業を受けます。

フィンランドの教育制度では、1 時間の授業につき休み時間は 15 分と決まっており、子どもたちは外へ遊びに行きます。

「休み時間には、校庭で友達とよく側転をするの」と言うアデリンの趣味はダンスです。

校庭は広く、そのすぐ隣に森林もあるため、オリエンテーリングをするのにいいと言います。アデリンのもう一つの趣味がオリエンテーリングなので、わざわざ遠くまで出かけずにできるのが気に入っています。

大好きなこと

「私はこの学校が好き。子どもの数が約 90人と少なくて、みんなお互いのことを知っているから」と言うアデリン。「入学したときから同じ担任の先生に教わっているので、みんなと顔なじみで仲が良い」のも学校が好きな理由なのだそう。

フィンランドの他の子どもたちと同様、アデリンにも無償で温かい昼食が提供されています。

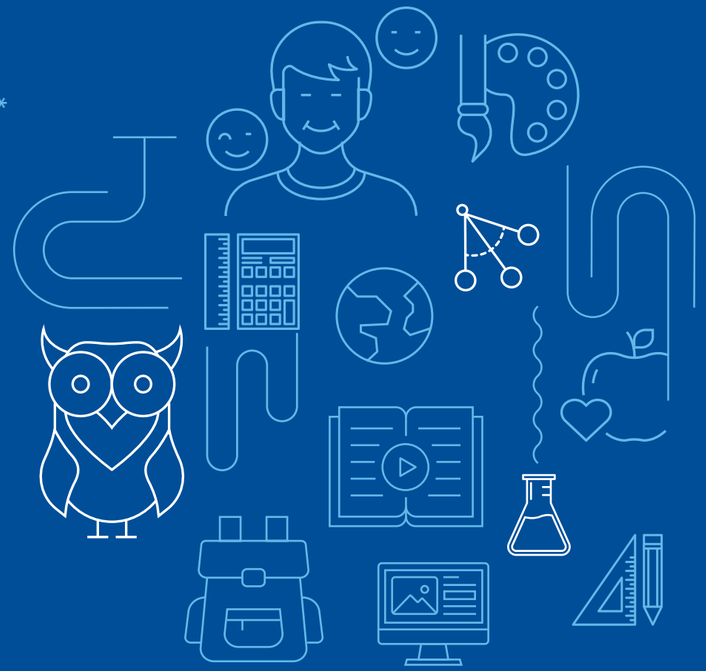
彼女のお気に入りは、フィンランドの給食で人気の定番メニューであるミートソース・スパゲッティ、野菜のスープ、ソーセージのオーブン焼きです。

アデリンは、平日の放課後にはダンスの練習に通っています。レッスンがない金曜日には友達とクッキーを焼くのが楽しみです。「ありあわせの材料を使って、オリジナルのレシピを試すの」

こちらの QR コードから、アデリンの学校での一日を動画でご覧いただけます。

総合学校で教えられる教科

- 母語と文学
- もうひとつの公用語
- (フィンランド語またはスウェーデン語)*
- 外国語
- 数学
- 環境学習
- 生物
- 地理
- 物理
- 化学
- 保健
- 宗教または倫理 **
- 歴史
- 社会
- 音楽 ***
- 視覚芸術
- 工芸
- 体育
- 家庭科 ****



*) フィンランドは、フィンランド語とスウェーデン語を公用語としています。

**) 総合学校では原則として宗教または倫理の授業を受けます。

***) 追加で外国語、芸術的および実践的な科目、あるいはそれ以外の学校が提供する選択科目を選ぶことができます。

****) 他教科や課題とも絡めて進路や生活の相談・指導も行われます。

Photos: Miika Kainu

若者たちの声と職業意識

「僕が通っている学校にはポジティブでのんびりした雰囲気があり、優秀でプロ意識の高い先生たちがいます」と語るのは、ヘルシンキ自然科学高等学校に通うエルメリ・メローニ（16）です。

フィンランドの一般的な後期中等教育システムには、378校の教育機関に年間15万人以上の生徒がいます。メローニもその一人です。

「ヘッル」の愛称で知られるメローニの高校には約900名の生徒が在籍しており、そのうち3分の2は彼と同じ一般コースに、残りの3分の1は自然科学コースに所属しています。

ヘッル高校2年生のメローニがこの学校を選んだ理由は、兄が通っていたので馴染みがあったことと、自宅から徒歩すぐの距離に位置していたからです。

仲間とともに

「2022年に入学した当時は知り合いがいませんでしたが、今ではみんな友だちです」と言うメローニ。学校のフレンドリーな雰囲気は、先生や生徒のおかげだと考えています。

「先生たちは、僕たちが質問したり、考えていることを何でもオープンに話すよう促してくれます」と、メローニは言います。「学校では皆ユーモアのセンスがあって、雰囲気は明るいです」

高等学校では、生徒たちが自らスケジュール、つまり学期ごとの時間割を作成します。

「これはとても良いアイデアだと思います。生徒たちが責任の取り方を学べるので」と語るメローニの得意科目は心理学、生物学、そして英語です。

メローニは高校を卒業後、大学で経済学を学ぶ予定です。大学に行きながら、一緒にジムに通う友だちにパーソナルトレーナーとして指導するなど、好きなことをする時間も両立させたいと考えています。

後期中等教育（普通高校、職業専門学校）

フィンランドの義務教育は 2021 年に延長され、すべての若者が中等教育を修了するか 18 歳になるまでの就学が義務付けられました。

普通高校では、数学、自然科学、歴史、芸術文化、言語、生物学、地理学、物理学、化学にいたるまで、総合的な教育が行われます。

普通高校の最終学年に全国共通の高校卒業資格試験が実施され、それに合格することで、大学、応用科学大学、職業教育機関に進学する道が開かれます。

職業専門学校では、エンジニアリング、製造、建設、経営管理、保健福祉、芸術、人文科学といった分野で、特定の職業のための教育と実践的な訓練を提供します。職業訓練を受けることで、資格を取得したり高等教育での研究などにつながります。

Photos: Miika Kainu, Suvi-Tuuli Kankaanpää / Keksi / Finland Image Bank

「パーソナルトレーナーの仕事は将来のキャリアにも役立つと思います」と、メローニは言います。「テクノロジーは多くの素晴らしいことを可能にしますが、コーチやパーソナルトレーナーの場合は、本物の人間という点に価値があります」。デジタル世代育ちのメローニも、人とのつながりの重要性はしっかり認識しているようです。

価値ある仕事を学ぶ

ヴァンター職業専門学校「ヴァリア」は、若者や成人、組織を対象に実践的な職業教育を提供する、フィンランド全土に 159 校ある職業教育機関のひとつです。

2年生のニコ・リンナ（17）は、ヴァリアで配管工になるための訓練を受けています。

「職業専門学校の最大の利点は、自分の専門分野について実践的に学びながら、精神的にも肉体的にも自分自身の力を試せることです」と、リンナは言います。

パイプや排水システムの設置とメンテナンスを専門とする職人になるために、ビルメンテナンス技術の職業資格の取得を目指している彼は、「ここにはサポートを惜しまない、専門分野に詳しい先生たちがいます」と言います。

実践的なスキル

リンナは現在、ヘルシンキ首都圏にある大きなオフィスビルで実習中です。

オフィスビルの複雑な配管システムを修理するのはリンナの仕事の一部です。

「最新の工具は人間工学に基づいていて、軽く持ち運びやすくなりました。3D モデリングのプログラムで配管システムの内部も確認でき、配管作業も楽になりました」と言うリンナは、仕事を通してテクノロジーの恩恵を実感しています。

リンナによると、職業専門学校に通うもうひとつの特典は、カフェテリアの給食です。

フィンランドで後期中等教育を受けているすべての生徒には、授業のある日に無償の温かい給食が提供されています。

Photo: Elina Manninen / Keksi / Finland Image Bank

幅広い職業の選択肢

近年の職業教育の大規模な改革により、個人に合わせた継続的な学習、教育、個別の指導とサポートの機会が大きく増加しました。職業教育が目指すのは、すべての生徒が学ぶ喜びを体験し、自分の居場所を見つけることです。

フィンランドの職業教育訓練の目的は、卒業したすべての若者に就職か、高等教育での学習を可能にすることです。

教育は無償なので、生徒の学力やスキルを向上させ、教育格差を縮め、教育における平等を推進するのに役立ちます。このおかげで、学習を生涯いつでも継続できる可能性が広がっています。

横断的コンピテンシーには
7つの領域があります。
生涯学習の基礎となる
認知スキル、メタスキルと
学習の機会を意味し、
学業、仕事、趣味、
日常生活で必要とされる
能力を指します

変化する世界への適応

世界が急速に変化するにつれて、人生と仕事の舵取りに必要なスキルも変化していきます。生徒たちにはレジリエンス（困難を乗り越えたり適応して回復する力）と、学び方を学ぶスキルが必要とされています。

デジタルスキルと AI（人工知能）スキル、メディアリテラシーとマルチリテラシー、環境教育、気候変動と持続可能性、民主主義と人権、他者に敬意を表したり交流するスキルは、数学や美術工芸といった伝統的な科目と同様に重要です。教科横断的なコンピテンシーは、幼児教育から高等教育まで、フィンランドの教育制度の一部です。横断的コンピテンシーの目的は、生徒の学習能力を支援し、生徒が生涯を通じて積極的な学習者であり続けられるようにすることです。

好奇心と情報収集を促進し、生徒が自力あるいは周囲の人たちと協力しながら、さまざまな形のリテラシーを駆使して自発的に行動し、批判的思考を実践できるようになることを目指しています。

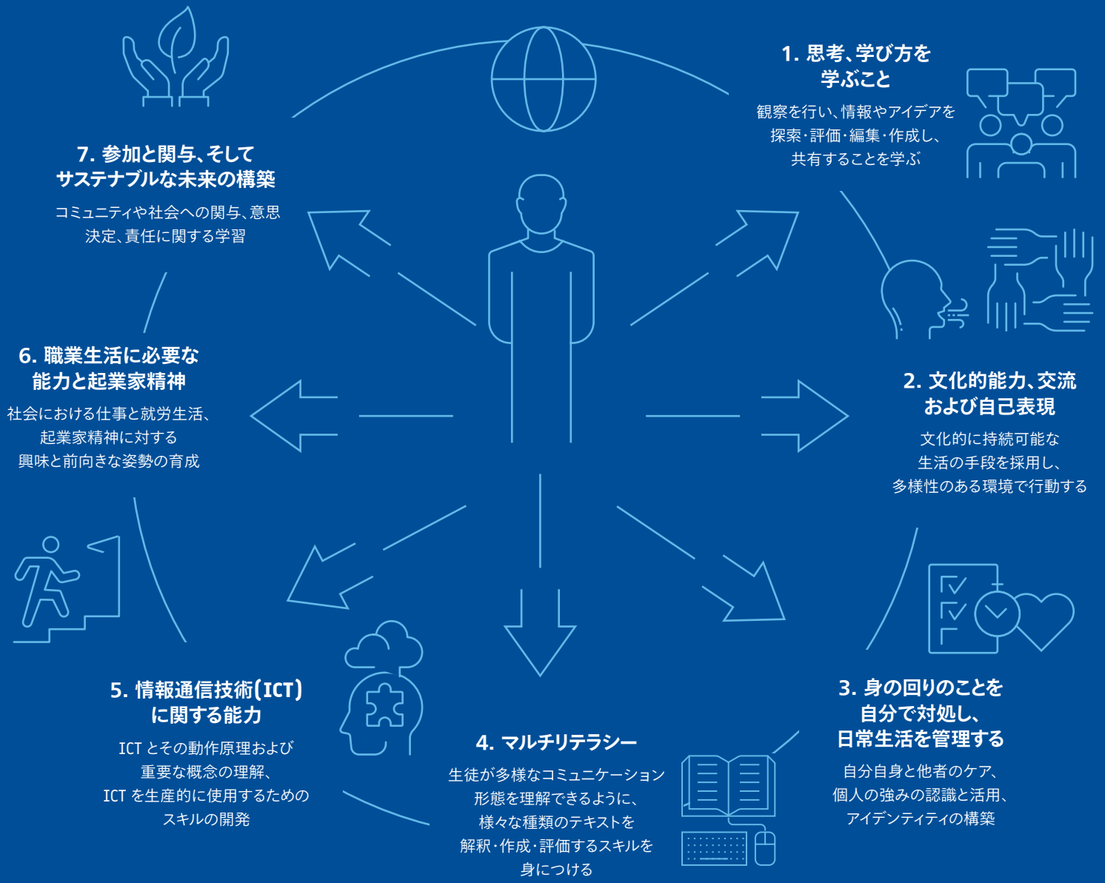
横断的コンピテンシーは、日常生活をどのように管理し、持続可能な方法で生活するかなど、現実における生活のニーズや課題にも関連しています。

これらの能力の発達は、保育と幼児教育が開始するとともに、日常の活動や遊びの一部分として自然に始まっています。初等・中等教育に入ると、教科横断的な学習モデルの計画や、フェノメノンベース・ラーニング（教科の枠を超えた「現象」を探求する教育方法）によってサポートされています。

横断的コンピテンシーの育成はフィンランドのコアカリキュラムに組み込まれています。

Photo: Jussi Hellsten / City of Helsinki

横断的コンピテンシー



デジタル時代のマルチリテラシー

ヘルシンキのヴオサーリ高等学校で化学と物理を教えるユストゥス・ムタネンは、マルチリテラシーは単一の教科ではないと明言します。「フィンランドの教育制度では、あらゆる教科のカリキュラムの一部なので、全員がマルチリテラシーの教師だと言えます」

現在、16～18 歳の生徒たちと AI（人工知能）と物理学を応用した先駆的なプロジェクトに取り組んでいるムタネンは、「この実験プロジェクトは、AI チューターを使用して、生徒が風力や太陽光発電などのエネルギーとエネルギー生産に関するポスターを作成するというものです」と説明します。

AI などの先進テクノロジーの役割が増大するにつれて、さまざまな形のリテラシーの使用方法を理解する重要性も増しています。 これには、視覚リテラシーや画像・ビデオの解釈だけでなく、従来の読み書き、テクノロジー、デジタルメディアも含まれます。これらのスキルは、幼児教育と保育から始まるフィンランドの教育システム全体に組み込まれています。

「私には 30 名の生徒がいます。なので AI チューターは、生徒が情報を見つけたり事実確認するのを手助けする、もう一人の先生のようなものです。もちろん、適切な手助けをしたか、ダブルチェックは私がします」と、ムタネンは言います。

ソーシャルメディアの科学

マルチリテラシーとメディアリテラシー学習のもうひとつの一般的な事例は、生徒たちがオンライン上で見つけた科学実験を授業に持ち込むことです。

「その情報源を信頼してもいいのか。誰が、何の目的でその動画を編集したのか。一緒に科学実験を分析して、その実験が正しいかどうかを見ていきます」

メディアリテラシー、メディア表現の理解、発せられた文章とその情報源を文脈と信頼性の観点から分析し、根底にある偏見や興味、動機などを理解することは、重要なスキルです。

学習の継続

AI チューターを実験的に使用すると、生徒と教師が協力し、AI に関連した教育と学習をどのように開発できるか貴重な洞察と研究を得ることができます。

「AI に関連するマルチリテラシーを教えながら、私も新しい発見をし、学んでいます」と言うムタネンは、この実験プロジェクトが自分にとっての生涯学習にもなっています。

Photos: Miika Kainu, Jussi Hellsten, Riku Isohella / Finland Image Bank

信頼できる専門家

信頼できる専門家でありイノベーターでもあるフィンランドの教師は、仕事において新しいアプローチを探求することが奨励され、その裁量も与えられています。

フィンランドの幼児教育と学校の教師は全員学士号の取得者です。初等教育以上の教師には、教育または特定分野の修士号の取得が義務付けられています。

教師が専門分野での学習と能力開発を継続することも奨励されています。

教育現場では、教師は学校コミュニティと学校文化の開発者という位置づけです。

フィンランドで教師とは大きな裁量をもつ自律した専門家なのです。

教師はそれぞれの担当科目の評価に責任を負います。それぞれの科目を教えるために割り当てられた授業時間について、カリキュラムとそのガイドラインに従いますが、教え方は柔軟に選ぶことができます。

テクノロジーは、あくまでも現在および未来に必要な能力の学習をサポートするツールのひとつにすぎません。

こちらのQRコードからマルチリテラシーの指導に関する動画がご覧いただけます。

こちらのQRコードからフィンランド人教師 8名が登場するコンテンツにアクセスすることができます。

次世代ネットワークの構築

「留学先にフィンランドを選んだ理由は、世界最高の6Gプログラムがあるからです」と、サファ・アリフは言います。「産業向けの6Gプログラムを提供している国はほとんどありません。6G研究の最前線にあるフィンランドは、私にとって明確な選択でした」と語る彼女はインドとサウジアラビア育ちで、現在はオウル大学の無線通信工学プログラムの修士課程を履修しています。

フィンランドには、英語で履修可能な550以上の学士号および修士号プログラムを提供する13の大学と22の応用科学大学があり、オウル大学もそのうちのひとつです。フィンランドでは英語で博士号を取得することも可能です。応用科学大学のなかには、看護、観光、ホスピタリティなどの分野でバイリンガルの学位プログラムを設けているところもあります。

バイリンガルプログラムの目標は、卒業生が英語に加え、公用語のフィンランド語かスウェーデン語を使って国内で専門職に就けるようにすることです。

Photos: Juha Niemelä

優れたコネクション

オウル大学の「6Gフラッグシップ（6G Flagship）」は、無制限の無線接続によって実現されるサステナブルで安全な未来社会を構築することを目標とした、世界初の6G研究プログラムです。

アリフの論文はシステムオンチップの無線システムに関するもので、彼女は通信、IT、家庭用電化製品を扱うフィンランドの多国籍企業ノキアで働きながらこの研究を進めています。

実践と学術を組み合わせた学び方は有益であると、アリフは感じています。

「大学側が、学生の理解度と知識を評価するシステムには本当に驚きました。試験のないコースもあれば、オープンブック（教科書を見ながら受ける）試験があるコースもあるので、インターネット

第3期教育（大学及び応用科学大学での高等教育）

フィンランドではラップランドからヘルシンキにいたるまで、品質の高い教育を受けることができます。

教育に関するアプローチは二本柱で、応用科学大学（UAS = University of Applied Sciences）と総合大学という2種類が存在します。

応用科学大学は、学士および修士レベルで職業指向の高等教育を提供しており、労働生活や地域開発との強い結びつきがあります。

大学は科学研究に重点を置いており、学士、修士と博士（PhD）レベルのプログラムを提供しています。

国際的アピール

フィンランドの高等教育機関では、英語で教える何百もの学士号および修士号のプログラムを提供しています。それらのプログラムのクオリティの高さと実践的な方向性、そして興味に応じて独自の学位を取得できる柔軟性は、海外からの留学生から高く評価されています。

フィンランド留学の魅力のひとつは、まず在留許可の申請プロセスが簡単だということです。申請はオンラインで行え、手続きも非常にシンプルです。フィンランドでの単位取得留学が認められれば、規定によりすぐ在留許可を申請することができます。留学後の在留許可方針も、国際的に比較すると寛大です。

フィンランドには
教育文化省が
監督する
13 の大学と
22 の応用科学大学が
あります

で簡単に見つかる情報の暗記に時間を費やす無駄がありません」と、アリフは言います。「私は今、実生活で役立つことを学んでいます!」

北極圏のライフスタイル

大学のオリエンテーションで新入生をガイドする役目を担うアリフは、卒業後の明確なビジョンをもっています。

「テクノロジーの人間的な側面に重点を置き、この業界にいる若い女性たちを支援しながら勇気づけて、業界が確実に安全な場所になるよう力を注ぎたいと考えています」

フィンランドはアリフにとって、欧州大陸で初めて訪れた国、初の欧州体験です。

オウルはフィンランド北部に位置し、北極圏とラップランドに近い都市です。フィンランドの極北には明確な四季がありながら、とくに冬にはおとぎの国のような自然現象が見られます。

「私は雪が大好きなので、スケートなどのアクティビティを通して自然を満喫しています」と、アリフは言います。「海水が凍るのは今でも超常現象のように感じます。インドのウッタルプラデーシュ州に住む私の家族には、冬の間に海上を歩いたりスケートしたりできることが信じられないみたい。『どうして立っていられるほど氷が厚いの?』と、よく聞かれます」

オーロラは、夜空に緑、赤、紫、青などのさまざまな色が踊るように見える光の帯です。

「その美しい自然現象が、家の玄関口からも見られるんです!」と言うアリフは、今もその光に魅了され続けています。

こちらの QR コードから、オウル大学に通うアリフの学生生活に関する動画がご覧いただけます。

アアルト大学	エスポー
ヘルシンキ大学	ヘルシンキ
東フィンランド大学	クオピオ
ユヴァスキュラ大学	ユヴァスキュラ
ラップランド大学	ロヴァニエミ
LUT大学	ラッペーンランタ
オウル大学	オウル
ハンケン経済大学	ヘルシンキ
ヘルシンキ芸術大学	ヘルシンキ
タンペレ大学	タンペレ
トゥルク大学	トゥルク
ヴァーサ大学	ヴァーサ
オーボ・アカデミー大学	トゥルク
防衛大学(国防軍の管轄)	ヘルシンキ
アルカダ応用科学大学	ヘルシンキ
セントリア応用科学大学	コッコラ
ディアコニア応用科学大学	ヘルシンキ
ハーガヘリア応用科学大学	ヘルシンキ
HUMAK応用科学大学	ヘルシンキ
ハメ応用科学大学	ハメーンリンナ
JAMK応用科学大学	ユヴァスキュラ
南東フィンランド応用科学大学	コウヴォラ
カヤーニ応用科学大学	カヤーニ
カレリア応用科学大学	ヨエンスー
LAB応用科学大学	ラハティ
ラップランド応用科学大学	ロヴァニエミ
ラウレア応用科学大学	ヴァンター
メトロポリア応用科学大学	ヘルシンキ
オウル応用科学大学	オウル
サタクンタ応用科学大学	ポリ
サヴォニア応用科学大学	クオピオ
セイナヨキ応用科学大学	セイナヨキ
タンペレ応用科学大学	タンペレ
トゥルク応用科学大学	トゥルク
ヴァーサ応用科学大学	ヴァーサ
ノヴィア応用科学大学	ヴァーサ
オーランド応用科学大学	マリエハムン
警察大学(内務省の管轄)	タンペレ

生涯
学び続ける
文化を
すべての人に

フィンランドにおける「リベラル成人教育（liberal adult education）」とは、生涯学習がウェルビーイングと平等、積極的な社会参加を支えるという考えに基づいた教育です。

すべての人にアクセス権を与えるという目標を掲げる同教育では、あらゆる年齢や人生の段階で学習が積極的に奨励され、サポートされています。

リベラル成人教育を提供している施設では毎年、数時間から1学年かけて取り組むコースやプログラムを10万以上揃えています。

授業のカテゴリは、人文科学から経営管理、自然科学、工学、交通、さらには保健体育、観光にホスピタリティまでと、多岐にわたります。

コースやプログラムは、地域や地元のコミュニティのニーズを満たすように設計されています。

継続的な能力開発のための多様な選択肢

リベラル成人教育を提供しているのは、成人教育センター、国民成人学校、スポーツ学院、夏期大学と学習センターの5種類あり、それらは全て国からの資金援助を受けています。

成人教育センターではコミュニケーションスキルや、文化や政治に対する意識を高めるなど、市民的スキルの自主的な教育と成長の機会を提供します。

国民成人学校は全日制の学習と、若者や成人向けに一般教育、職業教育とトレーニングのコースも行っています。

夏期大学では、すでに学位を取得している人たちが継続教育を受ける場であり、同時に単位が取得できるオープンカレッジとしても機能します。

国または地域のスポーツ学院は、全日制の教育を提供する寄宿学校を拠点としています。スポーツ団体やエリート選手をサポートするトレーニングや教育と並行して、国民全体の運動と福祉の促進も行っています。

学習センターは、生涯学習と積極的な社会参加を促進する目的で、単独あるいは市民団体や文化団体と協力して、教育プログラムを開催している国立の機関です。

フィンランドに来て間もない外国人向けには、フィンランドの公用語であるフィンランド語とスウェーデン語などの基本的な読み書きを含む幅広い実践的な語学コースが提供されています。

これら5種類の生涯学習はすべて、全国規模の優れた公共図書館システムによって補完されています。

こうした教育の目標は、すべての人たちが社会で機能し、物事に影響を与えられるよう、必要な知識とスキルを習得する機会をもたせることです。

Photo: ElinaManninen / Keksi/ Finland Image Bank

Photos: Laura Dove / Helsinki Partners, Jussi Hellsten / Visit Helsinki, Maija Astikainen / City of Helsinki

インクルーシブ教育

すべての子どもたちはありのままに受け入れられ、必要な支援が受けられるべきです。

フィンランドの教育制度は、家庭背景や能力に関係なく、生徒一人ひとりが成長するために必要な支援を提供することを目的としています。

出発点となるのは、学習・発達・ウェルビーイングに関連する子どもの強みとニーズであり、共同学習という環境下で提供される解決策です。

これらは1998年に可決されたフィンランドの教育基本法に組み込まれており、「一般的」「強化」および「特別」という3段階の支援が提供されています。

一般的な支援とは、日常の学校生活の一環として提供される指導や早期介入だけでなく、個別の教育的な解決策も意味します。より強化された支援は、複数の専門家による共同作業で、一人ひとりに合わせた支援が提供されます。特別な支援では、必要であれば生徒に合わせた教育計画が一から練られます。

みんな一緒に

フィンランド教育基本法には、教育のインクルージョン（包括性）に対するフィンランド独自のアプローチが表れています。すべての教師の責任として、地域レベルのシステム内で解決策を提供するよう強調されているのです。

学校カリキュラムの共通目標に基づいて、各教師は生徒一人ひとりの成長を促すための方法や教材を選択することができます。

たとえば、教師は子どもたちの集中力の持続時間に合わせたアクティビティを計画したり、身体的に活発な子どものために姿勢を保持するクッションやスツールといった便利な道具を使用できます。

生徒には学習支援を受ける権利があります。一般的な支援の形には、小グループでの補習や部分的な特別教育も含まれます。特別指導にあたる教師とアシスタントは、フィンランドのほぼ全ての学校に配属されています。

すべての人たちに合う学習文化を構築するにはまだ課題がありますが、インクルーシブ教育の目標は明らかです。皆に平等な機会を与え、可能な限り最高の結果を保証するというものです。

現代的な学習の機会

フィンランドの現在の目標は、勉強や研究をする上で国際的かつ魅力的な国になることです。

フィンランドは 2030 年までに GDP の4%を研究開発に投資し、経済協力開発機構（OECD）加盟国のトップに立つ計画があります。2021年のOECD の調査によれば、フィンランドは教育への投資の点でイスラエルと韓国に次いで第3位にランクされています。

世界の変化に伴い、現在と将来必要とされるスキルをすべての人たちに提供するには、教育システムも進化する必要があります。気候変動の危機から人口の高齢化、AI（人工知能）やデジタル化といった要因により、生活や仕事の性質は変化を続けているからです。

先見的な思考

幼児教育から成人教育にいたるまで、フィンランド教育のあらゆる段階で話題の重点分野には、さまざまな取り組みやプログラムが組み込まれています。

Photos: Ilari Valimäki, Pasi Markkanen / Finland Image Bank, TAMK, Jussi Hellsten / City of Helsinki

マルチリテラシーとメディアリテラシー教育は、情報通信技術（ICT）の能力を強化し、さまざまな種類のメディアを理解するためのツールとスキルを提供することを目的としています。

たとえばプログラミングのスキルは、幼児教育と保育の早い段階から導入されます。マルチリテラシーとメディアリテラシーに関する学習は、初等中等教育、前期中等教育、後期中等教育、高等教育および生涯学習まで継続します。

「スクール・オンザ・ムーブ（Finnish Schools on the Move）」と呼ばれる全国規模の運動促進プログラムは、学校にいる間に体を動かす時間を増やすことによって、総合学校に活発な身体活動の習慣を根付かせることです。よりアクティブな登校方法や休み時間に体を動かすことの推奨は、学習プロセスに役立ち、ウェルビーイングを促進する、生涯続く習慣に導きます。

もうひとつの重要なテーマは、サステナブルな未来の構築への参加と関与です。身近な自然と自分たちの関係を通じて環境保護の重要性を理解する学習は、地域社会やコミュニティへの関与、意思決定や責任を学ぶことで培われます。

その目的は現在と未来において、あらゆる年齢の子どもたちに、より良い生活を築くために必要なスキルと能力を授けることです。

課題を受け入れて

フィンランドの教育システムの長所は、学習者中心の指導法、教育レベルの高い教師、そして新しい技術に迅速に対応する柔軟性です。

しかし世界が変化するにつれて、未来のスキルを教えるには教育システムも進化する必要があります。トゥルク大学フィンランド未来研究センター（FFRC）のプロジェクトスペシャリストであるサリ・ミエッティネンによると、それは起こりうる課題を予測し、対応することを意味します。

すべての人たちに平等な支援を

「理論的には、フィンランドではすべての人たちに博士号取得のための勉強をするチャンスがあるはずです」と、ミエッティネンは言います。「しかし現実には、そのためにはまだ乗り越えなくてはならないハードルがあります」

「私たちは、誰もが教育や学習を支援するサービスに確実にアクセスできるようにしなくてはなりません。とくに若者たちの間で増加傾向にある支援のニーズに教師だけでは対応しきれないため、予算や人員、支援サービスの割り当てが必要です。大学レベルでも、成人になった学生なら自分のことが自分ででき、必要なリソースも見つけられると思われがちですが、必ずしもそうとは限りません」と、彼女は言います。

教育バージョン2.0

フィンランド語に「シヴィステュス（sivistys＝文明化）」と呼ばれる、フィンランドの教育と文化の指針となる概念があります。知識が豊富で賢明、倫理的かつ文化的に調和していることに重きを置く価値観を指しています。

「おそらくシヴィステュス・バージョン 2.0 のアップデートを検討する時期が来たのでしょう」と言うミエッティネンは、さらに言葉を紡ぎました。

「今日のシヴィステュスとは何を意味するのでしょうか。高等教育の役割を再考する必要があります。横断的な活動ができていない部門はありませんか。外国の学歴や職業資格など、従来とは異なる多様なスキルや才能を活用するのはどうでしょうか。誰もが簡単に多くの情報を入手できるようになった今、私たちは教育の目的を再評価すべきでしょう。教育のより良い役割とは、情報を批判的に処理する能力を学び、議論できるようになることではないでしょうか」

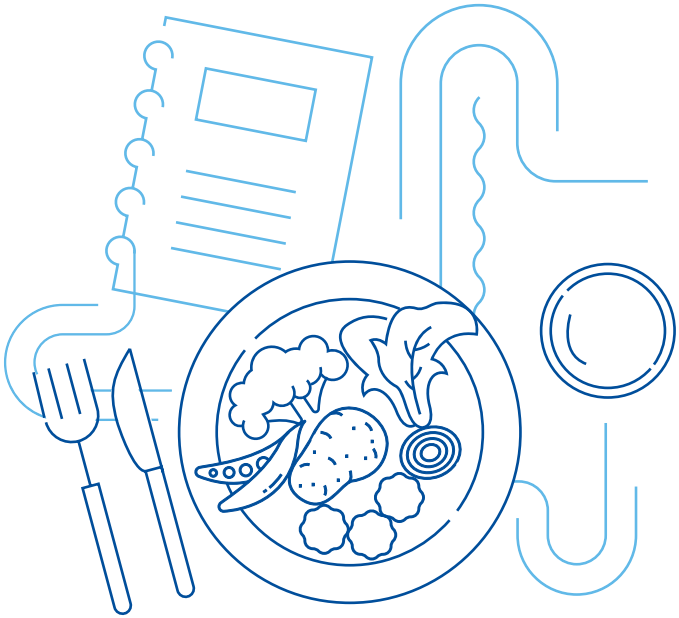
環境社会の持続可能性

この先の世界で、持続可能な経済成長とウェルビーイングを達成する最善の方法は、すべての人たちの能力と才能を結集することです。

「そのためには、未来のために必要なスキルと『フューチャースキル』を区別して、人々が未来の役割をよりよく理解する必要があります」と、ミエッティネンは説きます。

「未来のために必要なスキルとは、特定の未来にどのようなスキルが必要になるか予測することを意味します。たとえば1～5年以内に、各業界でどのようなスキルが必要になるかというような。後者のフューチャースキルとは、将来に向けて持続可能な意思決定を行うために必要なスキルを意味します。教育の目標は、サステナブルな未来の先を見据えることであるべきです」

Photo: Jussi Hellsten / Visit Helsinki



ご存知ですか?

フィンランドでは学校給食が無料です。
1948年、世界に先駆けて毎日の温かい昼食提供が始まりました。

本誌記事は各執筆者の責任に基づいて書かれています。
参考資料としてご自由にお使いください。
駐日フィンランド大使館: sanomat.tok@gov.fi

SUOMI
フィンランド

FINFO
Finland, Finns, Finnomena

this is
FINLAND.fi
things you should and shouldn't know